

# 新百学連環論序説（Ⅰ）

— エンサイクロペディアとCMSのあいだで —

The Return of the Encyclopedia : Towards a New Concept of the Humanities in the Digital Age, Part I

吉見俊哉\* Syunya Yoshimi

- I メディエーションとしての百学連環（本号）
- II エンサイクロペディアの歴史的形成：帝国と啓蒙（仮、次回）
- III 近代日本におけるネットワーク知の集团的思考（仮、次々回）
- IV 人文知のユビキタスの生成構造：CMSと百学連環（仮）
- V 情報学環における新百学連環の実践（仮）

## I メディエーションとしての百学連環

### 1. 西周と「百学連環」

「百学連環」とは、明治初年代、西周によって名づけられた「エンサイクロペディア」の日本における最初の訳語である。西は、その著『百学連環』の冒頭、「英語のEncyclopediaなる語の源は、希臘の *Εγκυκλιος παιδεία* なる語より来たりて、即其辞義は童子を輪の中に入れて教育をなすの意なり。故に今之を訳して百学連環と額す」と語り始めている<sup>1</sup>。いうまでもなく、西の名は近代日本で西欧伝来の諸々の学術概念の基礎を築いた人物として知られおり、今日われわれが自明なものとして使っている哲学的概念には、西の訳語に由来しているケースが無数にある。しかし、そうした一連の作業のごく初期の段階で、西がエンサイクロペディアを「百学連環」と訳していたことは、漢語の素

養と西洋の知識が融合した見事な訳語であったと言わなければならない。

もちろん西は、すでに西洋において「百般の学科を挙げて記載せる」一群の書物としての多くのエンサイクロペディアが刊行されていることを知っていたし、それらを参考にしてもいた。しかしながら彼は、この語そのものの核心には「学びの円環」があることを感知し、「百学連環」という、エンサイクロペディアの本質を衝くような訳語を考え出したのである。因みに西は、これに続けて「凡そ学問には学域と云ふありて、地理学は地理学の学域あり、政事学は政事学の学域あり、敢て其域を越えて種々混雑することなし」と延べ、「連環」は、「学域」といういくつかの個別の専門領域に分割されるのだとも述

\*東京大学大学院情報学環

べている<sup>2</sup>。とはいえ、少なくとも「エンサイクロペディア」という概念の定義においては、「連環」が「学域」に先行し、この「連環」は大事典という刊行物の形態よりも、諸々の教育的実践のネットワークなのだと考えられていた。

この場合、「環」とともにもう一つの重要なのは、「学」の語義である。西はこれについて、「学の字の性質は元來動詞にして、道を学ふ、或は文を学ふとか、皆な動詞の文字にして、名詞に用ゆること少なし。実名詞には多く道を用ゆるなり。学の字は、元ト師の児童に教ゆるの辞義にして、即ち師の如く師の児童を保護し教ゆるの形なり」と述べていた<sup>3</sup>。「文学」や「哲学」から「政治学」「経営学」「工学」、そして「情報学」までが一般化している今日では、「学」は「道」に比べてより制度化の進んだ知の体系を指示することが多い（実際、「文道」「哲道」などとは誰も言わないし、「政治道」「経営道」などと言うと、学問とは縁のない業界での処世術といったニュアンスが伴う）。したがって、西の言うような明治初期における「学」と「道」の対比を想像することは難しいが、当時は「学」は、より制度化が進んで名詞形と用いられる「道」とは異なり、専ら動詞形、つまり教師の生徒に対する実践の諸形態において理解されていたのである。

明治初年代の西の訳語が示すように、もともと「エンサイクロペディア」の語源とされるギリシア語の (egkuklopaideiá) は、「円環の」を意味する「ククロス」(kúklosは円、circleの語源)と、「子供」や「学び」を意味する「パイドス」(paidósはpedagogyの語源)が合成された語である。但し、ここでの「パイドス」は、個

体としての子供そのものよりも、子供の学びのプロセス (pedagogy) を含意していたと考えられるから、全体として「エンサイクロペディア」は、西がいうような「子供を環のなかに入れる」行為よりも、様々な「学びが環をなす」状態を指していたのではないかと思われる。このように細かい点ではいくつかの留保が必要であるにせよ、全体としてこの語の最初の邦訳「百学連環」は、エンサイクロペディアが「百科」の知識を編集・出版した大事典であるという以上に、まずは「百学」が環をなしながら学びを生んでいくような実践的なプロセスであることを的確に見抜いていた。

それにしても、いったいなぜ西周は明治初年代、「エンサイクロペディア」を「百科事典」ではなく「百学連環」と訳すことができたのだろうか。あるいは、「エンサイクロペディア」を「百科事典」ではなく「百学連環」と訳すことは、認識論的にいかなる可能性を含んでいるのか。われわれはまずこの小論で考えていきたいのは、このような問いである。というのも、一般的には、西周による西洋の学問の明治日本への導入は、たとえば福澤諭吉による同時代のそれを有していたような政治性を持つことはなかったと考えられている。しかし、このような留保にもかかわらず、今日のメディア状況において「エンサイクロペディア」に新たな知的想像の可能性があるとするれば、それは「百科事典」としてのエンサイクロペディアではなく、「百学連環」としてのエンサイクロペディアとしてであることは間違いないと思えるからだ。

いうまでもなく、ここにおいて「今日的な状況」として念頭にあるのは、「ウィキペディア」

をはじめとするインターネットに媒介されたCMS (Contents Management System) の隆盛である。CMSの拡大のなかで、「百学連環」について改めて考え直すこと。近代を通じ、人文知の実践のなかでくり返されてきた「運動とし

てのエンサイクロペディア」に改めて光を当てることで、逆に今日のCMSが内包している可能性と課題を明らかにしていくこと、これらが可能になってくるのではないか。

## 2. 文化運動としてのエンサイクロペディア

### ディドロのエンサイクロペディア・プロジェクト

「エンサイクロペディア=百学連環」について再考していく上で、まず確認しておかなければならないのは、これが常に膨大な知識人や専門家、好事家、実践者などを巻き込んでの文化運動であった点である。エンサイクロペディアの編集の中心的な担い手たちは、しばしば編集者というよりも文化運動のオーガナイザーの役割を果たしてきた。こうした特性は、そもそものディドロらの「百科全書」が顕著に示したものであった。桑原武夫ら京大人文研究所による戦後間もない頃の研究が示したように、プロジェクトとしての「百科全書」は、「生産者としての編集者、執筆者、出版業者およびその下にある印刷職人、取締り者としての当局、反対者としてのジェジュイットを中心とする反動派、シンパサイザーとしての自由主義的傾向の人々、読者としての民衆、これらすべてのものの活動」を含んでいた。この活動の範囲を最も狭くとして、執筆者たちの活動に限定した場合にも、百科全書プロジェクトの「執筆者の総数は184人、そのうち最年長者のファルコネは1671年生まれであり、最年少者のモルレは1819年に死んでいる」<sup>4</sup>。つまり、200人近い執筆者の一世紀を超える経験と活動を総合させたものだったのであ

る。文筆業者の数が今日よりもずっと少なかったこの時代、これだけの数の執筆者を集めて一つの活動に持続的に収斂させていくことは、それ自体、幅広い統一戦線の形成であったと言えることができる。

しかも、このような多数の執筆者、時間的・空間的な幅の広さは、単に量的なものにはとどまらなかった。ディドロの百科全書の執筆には、学者、著述家、編集者、僧侶などの「机上派」だけでなく、官吏や医師、軍人、徴税請負人、技師などから工場主、職人、印刷師、時計師、地図製作者などまでの現場の「実行派」が加わっていた。実際、184人の執筆者のうち、「実行派」は98人、「机上派」は67人である（不明は19人）。ディドロ以前の、たとえば『トレヴッ辞典』のような事典では、項目の大部分がジェジュイット派の僧侶たち、すなわちほとんど机上派のみによって書かれていたのに対し、ディドロの百科全書では実行派の執筆者が机上派の約1.5倍に上っていた。これは、合理的で実際的な知識の供給というディドロの目的から当然のことともいえるが、「編集者がイデオロギーにとらわれず、徴税請負人や税関係の官僚に経済を、職業軍人に兵学を執筆させた

ことが、『百科全書』成功の大きな理由となる」<sup>5</sup>。

桑原らの研究では、百科全書プロジェクトに多くの「現場」の実務家が加わった結果、机上派の役割にも大きな変化が生じていった点に注意が向けられていた。彼ら物書き知識人は、『百科全書』編集の方針設定を一手に引き受け、間接派（机上派）の活動なくしては孤立したままにいる直接派知識人（実行派）のあいだを飛脚となってあちこち歩いて、原稿を依頼してもらい、さらに、原稿と原稿のあいだに出てくるスキマをうずめる仕事をになった。このためには、普通に文士気質といわれる不規則性はぬぐいさられる必要が生じ、……ディドロのように執筆者と執筆者とのあいだをぬうて莫大な量の会話をする雑談的思想家が生まれた。また、編集の任にあたった人々が、執筆者たちとの連絡にあたって書いた莫大な手紙は、製品としての『百科全書』の一部ではないが、活動としての『百科全書』を考えると、その実に大きな部分を形成している。私たちは、『百科全書』のある巻のある頁を見るとき、これが氷山の水面に浮き出た部分に過ぎぬこと、この底に、いかに莫大な量の雑談と通信とがかくされているかを想像してみるべきである。つまり、間接派知識人（机上派）は、それまでフランス思想界に存在していなかったところのコミュニケーション網を、直接派知識人（実行派）の間にはりめぐらしたのである<sup>6</sup>。

以上から、フランス百科全書の根本にあった

特徴は明らかである。それは、結果として一群の出版物の姿をはるかに超えて、数百人という「知識人」を巻き込んだ文化運動であった。しかもこの運動では、執筆者全体の半数以上を実社会の様々な「現場」で活動する実践者が占め、同時に要となる部分は「机上派」が担って個々の実践的なフィールドをつないでいた。そして、そのような知的ネットワークのなかで、最終的に出版物の形態に固定されるよりもはるかに莫大な会話と通信、討議が織りなされ、蓄積されていたのである。「エンサイクロペディア」とは、まさしくこのような莫大な会話や通信、討議からなるネットワーク状の認識プロセスそのものであったと考えるべきである。そうした意味で、ディドロは単なる書物としての『百科全書』の編集者ではなく、このような幅広い知識生産運動のオーガナイザーであった。実際、ディドロは、運動のオーガナイザーとして卓越した能力を持つ人物であった。桑原らによれば、「『百科全書』に協力する人間集団の中の各人について、ディドロはその人を動かす動力が何であるかを的確に見抜き、その動力にうったえることによって、それぞれの人を動かした」。たとえば、ヴォルテールを動かすには名誉心に訴え、ダランベールに対しては、彼への金銭的報酬を増すために自分の取り分を削ろうとすらした。グリムにはグリム自身の仕事に親身に協力し、さらには『百科全書』を支える労働者たちが死んだ場合、本人の死後、家族の面倒をみてやりさえした。

## 近代日本の百科事典と百学連環的ネットワーク

以上のように、桑原ら京大人文研究所の百科全書研究は、それ以前、あるいは以後のいかなる百科全書研究にも増して、フランス百科全書のこうした集団的運動としての側面を強調した。この注目が、彼らの研究を刊行から半世紀以上を経てもいささかも古びさせていない大きな理由なのだが、1954年という占領終結直後の刊行時の状況からするならば、桑原らの関心はまったく切実なものであった。桑原は、百科全書研究の序言で、ディドロたちの活動の文化運動としての側面を強調しつつ、「日本では明治以来、さらに敗戦後においてすら、進歩的ないし啓蒙的な思想家たちが、ややもすれば小集団に分裂し、当面の敵と戦うかわりに相互間で本気にかみつき合う、という悲しむべき事態を示してきたことを思うとき、18世紀フランスの進歩的思想家たちが、さまざまな色彩のイデオロギーに立ちながらも、およそ30年の長きにわたって協調を保ちえた事実は、私たちを大きな驚きと深い感嘆にさそわずにはおかない」と告白している<sup>7</sup>。明治以来、自由民権であれ、大正デモクラシーであれ、あるいは昭和のマルクス主義であれ、そしてさらには戦後の様々な民主主義的潮流においてすら、日本における思想運動は、フランス百科全書が示したような幅広い横断性と持続性を獲得できていない、というのが桑原の判定であった。

とはいえ、この同じ百科全書研究で桑原と並んで主要な役割を果たしていた鶴見俊輔からするならば、この総括には若干の異論があったかもしれない。鶴見は当時、戦後日本において最も重要な横断的思想運動であった思想の科学研

究会のリーダーのひとりであり、まさにこの『思想の科学』は、18世紀の百科全書にも通じる横断性と、さらにそうした啓蒙主義民衆の日常意識の内から、彼らの言葉でいうなら「ひとびとの哲学」の実践として新しい知を立ち上げていこうという意気込みに満ちていた。しかも、近代日本における民間レベルからの人文知の系譜を振り返るならば、大正時代に吉野作造のバックアップを受け、石井研堂や宮武外骨が活躍した明治文化研究会、あるいは1930年代における長谷川如是閑から三木清、戸坂潤、さらには丸山真男までを巻き込んだ唯物論研究会など、数々の知的ネットワークが光彩を放ってきたことに気づく。たしかに桑原が自嘲するように、これらを含めて近代日本における多くの思想運動は、フランス百科全書の運動が持ちえたような長期の持続性は持ち得なかったかもしれない。しかし、たとえば『思想の科学』が、60年代半ばまでおよそ20年近くにわたり、戦後的批判知性の中心的な基盤をなし得たことを考えれば、桑原の告白は、いささか自己を過小評価しすぎなのである。

それどころか、実際には桑原らの共同研究そのものが、百科全書的な集団知性の実験であったことは明白である。拙著『万博幻想』に詳論したように、やがて桑原の啓蒙主義的理想は大阪万国博覧会に向かう時代の国家と資本、膨大な大衆の渦のなかで押し流されていくことになるのだが<sup>8</sup>、少なくとも50年代、彼ら啓蒙知識人は、自分たちの活動をフランス百科全書の運動になぞらえながら、横断的な集団的想像力の戦後日本での可能性を実験してみることができ

た。桑原は、人文研究所の百科全書研究では、先行する彼らのルソー研究の実績を引き継ぎつつ、プロジェクトとしての横断的な共同性をいっそう強化したという。そのために、「各部門は数名の研究者によって分担されるが、その研究は全員出席の研究会で発表され、討論の対象とされる。論文は、部門所属の各人が提出する材料または草稿にもとづいて、グループ中の一人が執筆するが、それはまずグループ内で修正された上、あらかじめ全員に回覧されてから、検討会に出され、その討議の結果を撰取したのち初めて清書されるのである。したがって、各論文の末尾にしるされた氏名は、一おうの責任者を示すが、理論的にはこの本全体について全参加者が責任をとる」。この文面からは、桑原がまるで今日の電子メールやメーリングリストが発達したメディア環境を予感していたかのような印象すら受けるが、そのような技術的条件がない状況で、桑原らは、可能な限り緊密な知識生産のネットワークを意識的に構築しようとしていたのである。こうした試みは、それ自体、一種の百科全書的ないしはディドロの実践であったということができる。

桑原の総括に対する留保はさらに続く。西周の『百学連環』にもあったように、桑原らの百科全書研究よりもずっと前から、日本でもエンサイクロペディア構築の試みは存在したし、しばしば莫大な知識人や実務家を巻き込んだプロセスになっていた。それどころか、少なくとも量的な面では、近代日本の百科全書運動は、フランスのそれを凌駕する規模にまで発展していくのである。すでに国家事業としては、1879年に文部省により『古事類苑』の編纂が始められ、

東京学士院、皇典講究所、神宮司庁と引き継がれて1913年に和装本350巻、洋装本50巻、索引1巻という巨大な書籍群として完成する。とはいえこれは、近代的な百科全書というよりも、むしろ江戸時代からの「類書」の系譜の延長線上に位置づけられるべき国家事業であった。

他方、民間的なレベルでは、日本初の近代的百科事典は、1890年から91年にかけて田口卯吉が編集した『日本社会事彙』（経済雑誌社）であるとされる。田口は他にも『大日本人名辞書』の編集、また『群書類従』や『国史大系』の編纂などに関与していたから、西と共に明治期の主要なエンサイクロペディストであったといえる。やがて1901年から12年にかけて、同文館から『大日本百科辞書』が刊行される。同文館はこの「辞典」を、まずは『商業大辞書』や『法律大辞書』といった分野別にして刊行し、最後にそれらを合体して『大日本百科辞書』を完成させようとした。これは大事業となり、同文館の「辞典」は明治日本の大事典を代表格として今でもしばしば言及され、電子化もされるものとなるが、同社自体は1912年に倒産してしまう。

1970年代から平凡社で百科事典編纂の事業を進めた龍澤武は、この同文館の百科事典の後、三省堂、平凡社と続く日本の百科事典出版の歴史が、いずれも出版社本体を倒産に至らせるほどの大事業となっていった歴史を振り返る。龍澤によれば、明治末から大正にかけて、同文館の事業を引き継いだのが三省堂の『日本百科大辞典』であった。総裁に大隈重信を戴き、文字通り国家的な事業として1908年に刊行が始まるのだが、余りの規模の大きさに資本が耐えられなくなり、三省堂は1912年に経営破綻に陥って



しまう。しかし、すでに約600名執筆者を動員する国家的な事業となっていた百科事典出版を途中で放棄するわけにもいかず、三省堂救済の措置がとられて事典は1919年に全10巻が完結する。こうした1900年代から10年代にかけての第一波の百科事典出版に続き、さらに大規模な事典出版が事業化されていくのは1930年代のことである。老舗の出版社であった富山房は、1906年に出した『日本家庭百科辞典』を発展させ、1934年から37年にかけて全15巻の『国民百科辞典』を刊行する。執筆者は約1000名といわれ、すでに三省堂の大辞典の規模を凌駕していた。ところがまったく同じ頃、平凡社が、1931年から全28巻、執筆者は2000名に及ぶ空前の大事典の刊行を開始、富山房の事業を圧倒していくのである。

1930年代の平凡社の『大百科事典』は、それまでの日本の百科辞典編纂のスケールを大きく塗り替えてしまった。実際、エンサイクロペディアに「辞典」ではなく「事典」という文字が使われるようになるのは、この平凡社の事典からである。後の平凡社の百科事典事業の中心人物でもあった龍澤は、この30年代の平凡社の百科事典事業は、いまだ新興の出版社であった同社が、老舗の名門出版社であった富山房の事業に競り勝つために、圧倒的な規模とスピードに敢えて挑戦したのだと推察している<sup>9</sup>。そしてこの平凡社の大事典によって、日本の百科事典は、ブリタニカやラルースといった西欧の巨大なエンサイクロペディアに匹敵する規模に達するのだ。以後、戦後になると、平凡社は林達夫を編集長にして、全31巻の『世界大百科事典』を1955年から59年にかけて刊行する。執筆者は

4000名に及んだが、これは経営的にも成功し、70年代まで数次にわたって改訂版が継続的に刊行されていく。平凡社では、この事業の延長線上で1970年代、加藤周一を編集長として、編集委員会の数が約120、編集委員が約520名、執筆者7000名以上という、平凡社本体の経営基盤をのみ込むほどの空前の規模の大編集部が組織され、日本の百科事典史において金字塔となる全35巻の『世界大百科事典』が出版されていくのである。

このような日本の百科事典史を振り返るとき、しばしば出版社本体の経営を危うくしてまでも進められた一連の事業が、その熱意と規模、編纂に関わる知識人の広がりにおいて、欧米のエンサイクロペディア事業に十分に比肩するものであったことがわかる。そしてまた、明治文化研究会や思想の科学研究会をはじめとして、国家や大学の権威に寄りかかるのではない批判的な知の連環が、近代日本にも脈々と息づいてきたことも疑いを入れない。桑原武夫の西洋中心主義が過ぎるフランス百科全書へのオマージュを突き破って、われわれはむしろ近代日本、そして近代アジアにおける百学連環的なネットワークと百科全書プロジェクトの水脈をたどり直してみることができるであろう。そして、そのような作業を進めていったとき、冒頭で触れた西によるエンサイクロペディアの訳語「百学連環」は、単に優れた訳語というだけでなく、現代日本やアジアにおいてエンサイクロペディア的な集団的想像力を甦らせる貴重な示唆を含んだ言葉となるのではないだろうか。本稿では、やがてこうした可能性に正面から挑んでいくことにしよう。

### 3. カリキュラム／図書館／エンサイクロペディア

#### 知＝学びのシステムの三脚台

エンサイクロペディアは、単に多数の項目解説から成る事典の集大成なのではなく、膨大な知識人と専門家、実践者を巻き込んで持続的に展開されるネットワーク型の文化運動であった。そこでは最終的に活字に固定されていくのよりもはるかに膨大な会話、通信、討議が、異なる立場と専門、机上の知識人と現場の知識人を跨いで横断的なネットワークのなかで織り成され、蓄積されてきた。まさにこうした知の越境的なプロセスこそ、成果としての事典群以上に「エンサイクロペディア＝百学連環」の本質に属するものである。だが、エンサイクロペディアがプロセスであるのは、こうした「運動」としての側面だけでではなかった。もう一方で、「エンサイクロペディア＝百学連環」は、西洋において中世以来、学問知の中心を担ってきた大学教育のなかでも制度的なプロセスとして位置づけられてきた。「運動」としてのエンサイクロペディアのプロセス性が、どちらかというところ福澤諭吉的な「学問＝啓蒙」の論理に結びつくとするならば、むしろこのもう一方のプロセス性は、西周が考えていた「百学連環」にかなり近いものであった。

ピーター・バークは、ギリシア語で「円環」を意味する「ククロス」(kúklos) と「学び」を意味する「パイドス」(paidós) の合成語であったエンサイクロペディアは、もともと教育上の「学びの環」、すなわち高等教育のカリキュラムを指していたのだと論じている。それがやがて、「高等教育の施設で学生を補助するため

に、あるいはそのような施設の代わりとなるような自習用のコースを提供するために、ある種の本が教育の体系と同じ仕方で組織されたので、この用語がその種の本についても当てはめられるようになっていった」<sup>10</sup>。当然ながら、こして編集されていくエンサイクロペディアは、「ある知識観を、さらにはある世界観（つまるところ、中世以来、世界はしばしば一冊の書物として記述された）を、表現あるいは具象化したもの」となった。すでに、すべての知を総合するメタファーとしては、中世以来の「知恵の樹」(Arbor Scientiae) が存在したが、エンサイクロペディアは、「知恵の樹」のメタファーを引き継ぎながらより近代的な知のシステムに転換していく媒介的な役割を果たしていく。まさしくフーコーが論じた古典主義時代に生じていったこのプロセスを、バークは次のように概説している。

『樹』に代わって、17世紀にはより抽象的な用語が、知識の組織構造を記述するのに使われるようになる。その用語とは、(古代ストア派の哲学者を連想させる)『体系』(system) であった。この用語は、……専門的な学問分野にも、知識の全体にも適用された。フーコーから遡ること350年前、1612年に、アルステートは、学問分野の体系の根拠となる原則を分析することを言い表すのに、『考古学』というメタファーを使っている<sup>11</sup>。



バークによれば、このようにして「知恵の樹」から分岐して発展していった学問の三つの「体系」が、「カリキュラム」と「図書館」、そして「エンサイクロペディア」であった。まず、「カリキュラム」とは、「伝統的な陸上競技からとられたメタファーである。走路を同じく、カリキュラムは生徒が沿って走らなければならない道筋のことである。カリキュラムは、『ディシプリン』の秩序あるいは体系であった」。そして、このディシプリンの体系性は、「図書館における書籍の配列の仕方によって、強められた」。

#### 《表＝タブロー》の空間とエンサイクロペディアの知

ミッシェル・フーコーは、このような形成期のエンサイクロペディアを、近代的な分析知の側ではなく、古典主義以前の言葉と物が複雑に絡まりあいながら同一平面に存在していた時代の内部から捉えていた。16世紀、言語はまだ恣意的な体系ではなかった。言語は物の秩序のなかに置かれ、そうした物の秩序の一部をなしていた。言語はその特権的な地平から世界の諸々の物を名指す存在ではなく、世界の一部をなし、物と絡まり、類比の関係をかたちづくる存在であった。否、フーコーは続けて、「言語の記号としての価値と二重化する（＝模写する）機能とが重なりあっていると言うべきかもしれない。言語は空や大地を語ると同時に、それらの模像である」と但し書きしている。つまり、言語の象徴機能、ある種の意味作用は、一般的意味での語と指示対象との間にはなく、「言語の实在そのもののうちに、言語と世界全体との全体的な関係のうちに、言語の空間と宇宙のさまざまな場所や形象との交錯のうちに」生じていた

図書館の書籍の配列秩序は、学問の分類体系を空間化することで、体系を支える役割を果たし続けてきたのである。さらにこの「体系」を支える「三脚台」の三番目の脚が、実践的なプロセスとしてのエンサイクロペディアであった。これらの三脚台は、互いに結びつきながら、ある「カテゴリーが自然なものに見えるように、そして他のカテゴリーを不自然な、それどころか不合理なものに見えるようにすることで、文化的な再生産を支えていたのである」<sup>12</sup>。

のである<sup>13</sup>。

フーコーは、16世紀末から17世紀初頭にかけて現れたエンサイクロペディアの試みは、まさしくこの言語と物の世界の二重化された場のなかで胚胎したのだと主張した。初期のエンサイクロペディアが存立していたのは、「見られるものと読まれるもの、観察されたものと人づてに伝えられたものとが区別されず、その結果、視線と言語とが無限に交錯する」一元的な連続面であり、そのような連続面において、言語は決して諸物の平面から超越した安定的な位置を確保することができなかった。エンサイクロペディアの記述とは、「人の知ることを言語という中性的な場に反映しようとするのではなく、空間における語の連鎖と配置によって、世界の秩序そのものを再構成しようとする」試みであった。こうした試みでは、「唯一かつ同一の知の形式のうちに、《見られ》、《聞かれ》たすべてのもの、自然なり人間なりによって《語られ》、世界という言語、伝承の言語、あるいは詩人の

言語によって《語られ》たすべてのものを、収録しなければならない」。つまり、たとえば「一個の動物、植物、もしくは地上の任意の物を認識することは、それらのなか、あるいはうえにおかれた記号（＝しるし）の厚い層全体を取り入れる」こととなった<sup>14</sup>。

これに対して17世紀、物の世界から離れて世界を秩序づける〈表＝タブロー〉の空間が出現する。ここでの議論の要点は、新たな「記号」の体制の確立であった。それまで言語は、物と同一の平面で、物との類比の関係をつくりながら世界を表象してきた。17世紀以降、言語は「物によって物質的に書かれたものとして実在するのをやめ、もはやみずからの空間を表象的記号の一般的体制のうちにしか見いださなくなる」。フーコーは言う。「無限であると同時に閉ざされ、みたされていると同時に同語反復的だった類似関係の世界は、分解され、いわば中央から大きく口をあける。一方の側には、分析の道具となった記号、すなわち同一性と相違性の標識、秩序づけの原理、分類学のための鍵となった記号が見られるであろう。もう一方の側には、かすかにつぶやきつづける物同士の経験的類似、思考のしたで分割と配分に無限の材料を提供するあの鈍くひびく相似があるだろう。一方には記号と分割と配分との一般的理論があり、他方には、直接的類似、想像力の自然発生的運動、自然の反復性の問題がある」<sup>15</sup>。つまり、記号が物の世界の一部をなすのをやめたとき、そのまま物との意味作用の関係に入ったのではなく、むしろまず記号自体の相互のネットワーク、すべての表象を統合する記号の体系がせり出していくことになったのである。そこでは今や、

「記号がそれが記号であるところのものといかにしていかにしてつながりうるかが、問われるようになる」<sup>16</sup>。つまり、記号が物の世界から乖離して自らのうちに表象可能性を内包するようになったとき、すべての表象が記号として結ばれ、全体として巨大な網目を形成することで、純粋に透明な、普遍的な論理に律せられる空間が出現したのだ。

まさしくこれこそ、17世紀に出現した〈表〉の体制であった。この体制において、「意味とは、連鎖して展開する記号の全体でしかありえぬこととなる。意味は、記号の完全な《表》のうちにあたえられる」のだ。総じていうなら、17世紀、西欧の知は、「記号と類似との際限のない円環を消散させたのち、因果性と歴史との諸系列を組織するのに先だって、表（タブロー）のかたちをしたひとつの空間を開き、この空間のなかを、秩序の計算可能な形態からもっとも複雑な表象の分析にいたるまで、たえず往復しつづけ」ることになる。知られるようにフーコーは、こうした〈表〉の体制が最も明瞭な姿で現れていた三つの領域、すなわち言語の理論、分類の理論、貨幣の理論という三つの領域についての詳細な分析を展開した。それらにここで深入りすることは避けたいが、たとえば博物学をめぐるのは、物と言葉が解きがたくもつれあっているような織物を、類比の論理に従ってさらに織り込んでいくような17世紀以前の記述に対し、古典主義時代に発展する博物学を可能にしたのは、まさしく「名ざすことの可能性を見こした分析によって表象のうちに開かれる空間」、別の言い方をすれば、そのようにして名ざすことの可能性から排除される表象を、最初か

ら除外することを可能にするような可視性の空間」であった<sup>17</sup>。

いうまでもなく、フーコーがここで明らかにしようとしていたのは、認識論的な台座、すなわち「合理的価値や客観的形態に依拠するすべての規準のそとにあるものとしての認識が、そこにおのれの実定性の根をおろし、そうやってひとつの歴史、みずからの漸次的完成化の歴史ではなく、むしろみずからの可能性の条件の歴史といえる、ひとつの歴史を明確化する、そうした場としての《エピステーメー》」の転換であった。まさにこの「エピステーメー」こそ、「知の空間において、経験的認識の多様な形態をつぎつぎと生みだしてきた、さまざまな布置」である。それは諸秩序の、また諸知識や体系の

#### 「汎知」から「編集知」へ

フーコーによる古典主義期の表象秩序についての考古学は、17世紀以降のエンサイクロペディアがどのような認識論的な転換を前提に登場してきたものであるかだけでなく、17世紀のエンサイクロペディアが、18世紀以降のそれとどのように異なっていたかも示唆している。17世紀の百科全書的な知が成立していたのは、物の平面からみずからを乖離させ、なお世界を模倣しようとした普遍的な〈表〉の空間の上であった。この〈表＝タブロー〉には、記号の体系によって「蓋然性、分析と結合、体系の正当化された恣意性」が導入される。「起源の探究と計算可能性、可能な合成物を定める表の成立とをもって単純な要素からの発生過程の復元、それらを同時にもたらすのも記号の体系であり、すべての知を一個の言語に近づけ、既存のすべての言

「実定的台座」であり、それぞれの時代と社会において認識と理論が可能にされていった空間である。そのような、すでに自明化され、日常的な認識にも、またその様々な反省的な知にも表立っては姿を現さないような台座において、「物を秩序づけるさまざまな一般的理論が、それに引きつづいてさまざまな解釈が、構築」されてきたのである。フーコーの知の考古学は、まさしくこのような「知の一般的空間、その布置、そこのあらわれる物の存在様態にたいして問いかけることにより、同時性の諸体系ばかりでなく、新しい実定性の発端を定めるのに必要かつ十分な、変動の系列をも規定」しようとしていったのであった<sup>18</sup>。

語に人為的記号と論理的性格の操作との体系をおきかえようとするのも、また記号の体系」である<sup>19</sup>。すべての学問は、単一の諸要素とその漸次的な合成過程の発見を目指しながら網羅的な秩序づけの企てをいだいていった。〈表＝タブロー〉は、まさにそうした「秩序の計算可能な形態から複雑な表象の分析にいたる」知が普遍的な原理のもので可能になる透明な空間をなしていたのである。

このような透明な〈表〉の空間の上に展開する普遍的な知としてのエンサイクロペディアの概念は、17世紀の文脈ではとりわけコメニウスの『世界図会』やライプニッツの百科全書主義のなかに表明されていた。古典主義時代の知にみられる普遍主義的な合理性への確信は、単純に「デカルトの影響」や「ニュートンの世界観」

に帰せられるものではなく、この時代の知全体が、それが可能にさせられていた〈表＝タブロー〉の上で、計量と秩序に関する普遍的な秩序を発見する可能性を信じたことにより由来している。だからこそ、コメニウスはさまざまなイコン的イメージを用いながら世界の成り立ちを少数の原理に還元しようとし、ライプニッツは質的な領域をふくむすべての表象の数学を打ちたてようとしたのであった。そこにあったのは、ある単一の原理から世界を普遍的に説明する言語を発見していくことへの確信であり、エンサイクロペディアはそうした普遍主義的な世界の記号化への意思を明白に表現するものであった。

古典主義時代をつうじて、知がたとえ経験的なものであっても普遍的《マテシス》と恒常的で基本的な関係を維持していたという事実は、あらゆる認識をついには統一的な《集大成》にまとめあげようという、たえず形を変えてつづけられた企てを正当化してきた。この企ては、運動に関する一般の学問、普遍的特徴記述、あらゆる分析的価値と統辞法的可能性において熟慮のうえ再構成された言語、そして最後に知をアルファベット順に配列した分析的〈百科事典〉という、多様な形態をつぎつぎととりはしたが、その基礎となるものはすこしも変様しなかった。……それらはいずれも、古典主義時代が同一性と相違性の分析および秩序づけの普遍的可能性を知の考古学的台座とすることによって設定した深い統一性を、出来事やテキストという目に見える

表面に顕在化している<sup>20</sup>。

フーコーはこうした古典主義時代の百科全書の欲望に、コメニウスやライプニッツからダランベール、そしてディドロまでを含めているのだが、われわれとしてはむしろ、18世紀以降のエンサイクロペディアの地平を17世紀的な地平とは区別しておいたほうがいい。なかでもそこに収録される項目をアルファベット順に配列することは、この知識システムの本質にかかわる決定的な変化であったように思われる。ピーター・バークに戻るならば、アルファベット順の項目配列はすでに中世から知られていた。そしてやがて、「パリにあるサン＝ヴィクトール修道院の有名な図書室は、16世紀初めにアルファベット順の蔵書目録を置いていたし、エラスムスも有名な諺集『アダージア』（1500年）をアルファベット順に編集した。ゲスナーの『書斎』（1545年）はアルファベット順に本を紹介しているし、『動物誌』（1551年）も動物をアルファベット順に記述」するようになっていた。大航海時代の商業的な発展や印刷技術の普及に伴う社会的に流通する情報量の急速な増大が、情報の可変的な追加が可能なアルファベット順への移行を促進したことは容易に察せられるが、それでも17世紀まで、全体としてみるならばアルファベット順の配列が分類における下位の補助的な方式という域を出ることはなかった。しかし、18世紀以降、アルファベット方式は、補助的なものから基盤的なものへと移行していく。それは決して単に大量の情報に対応するための便宜というだけでなく、むしろ「位階秩序的で有機的構造をもった世界という世界観から、個人主義的

で平等主義的な世界観への転換」に伴ったものだったのである<sup>21</sup>。

このような18世紀におけるエンサイクロペディアの成立平面の変容を重視して、寺田元一は、コメニウスやライプニッツの百科全書主義からディドロの百科全書プロジェクトに至る構造的な転換を、「汎知」から「編集知」への転換として捉えている。寺田によれば、「汎知」とは、「世界を本来透明なもの、全面的に認識可能なものと考えて、智による世界——神と人、人と人、人との——の調和を目指す神秘主義的主知主義」である。これに対して18世紀に登場する「編集知」とは、「われわれ世界認識の相対性を自覚した上で、それでも真理や正義といった普遍的基準を立て、その基準との関係で、そのときどきの利害・関心・状況にも応じながら、情報・ニュースへと知を再構成して、民衆の実践的目的に批判的に寄与しようとする、相対的で批判的な知」であるという<sup>22</sup>。要するに、「汎知」が普遍主義的で全体主義的な知であるのに対し、「編集知」は相対主義的で民主主義的な知であり、18世紀における市民社会の興隆と市民的公共圏を形成していくような諸々のメディア、コミュニケーション空間は、それまでの「汎知」的なエンサイクロペディアの空間を、「編集知」の空間へと脱構築していったということになる。

18世紀の百科全書についての寺田の詳細な研究で、この「汎知」と「編集知」の質的な違いが最も顕著に示されるのはダランベールとディ

ドロの対比においてである。ダランベールは、いわば17世紀以来の「汎知」的な百科全書の夢を抱き続けた最後に近い人物であった。これに対してディドロは、文字通り寺田のいう「編集知」を革新的な仕方実践していった人物である。ダランベールがディドロとの百科全書のなかで目指していたのは、全世界の現象を分析総合する体系的な知識の構築であった。彼は数学者＝哲学者として、百科全書では全知識分野を覆う知識の体系化がなされるべきだと考えていた。しかし、言葉の最良の意味において編集者＝ジャーナリストであったディドロは、世界がダランベールのような仕方首尾一貫した体系として記述できるとは考えていなかった。寺田によれば、ディドロたちの百科全書のなかで、このような彼の考え方が最もよく発揮されていたのが、クロスリファレンス（関連項目）についての解釈である。すなわちダランベールの場合、クロスリファレンスは、「全体をできるだけ少ない要素に還元し、それらの間の関連を諸要素の調和ある総合として示す」ためのものであったのに対し、ディドロにとってのクロスリファレンスは、「諸概念を拮抗させ、原理を対比し、公然と攻撃するわけにはいかないようなわらうべき意見をひそかにたたき、揺がし、ひっくり返す」批判的介入のための手段であった。ディドロは百科全書を、既存の知の体系化のためのものとしてではなく、すべての分野にわたる「基本的思考法を変革する」ためのメディアとして捉えていたのだ<sup>23</sup>。

## 4. デジタル・ネットワークと百学連環

### メディアーションとしてのエンサイクロペディア

以上のようにして、これまで述べてきた議論の二つの柱、すなわち文化運動としてのエンサイクロペディアと教育=学びの方法論としてのエンサイクロペディアという観点は、共にディドロという、フランス百科全書の編集によってこのメディアの歴史に決定的な転換をもたらした人物に結び合わされることになる。すでに論じてきたように、近代的な意味でのエンサイクロペディア=百科全書の成立には、古典主義時代における〈表=タブロー〉の成立、すなわち言葉の世界の物の世界からの自己準拠的な超越化が不可欠の要件であった。だが、このようにして超越的な地平において構造化される概念の普遍的体系という様相を帯びるようになった後でも、学びの円環としてのエンサイクロペディアの次元が完全に消え失せてしまったわけではないし、とりわけディドロの時代、エンサイクロペディアは文化的な運動のプロセス、「諸概念を拮抗させ、原理を対比し、公然と攻撃するわけにはいかないようなわらうべき意見をひそかにたたき、揺がし、ひっくり返す」批判的介入の次元を獲得していたのである。

こうしてみるなら、エンサイクロペディアは近代においてすら「システム」という以上に「プロセス」の次元を含み込んでいたのだが、このことを強調するなら、われわれはエンサイクロペディアをいわゆる「媒体」という以上に「メディアーション=仲介過程」として理解できるであろう。というのも、メディアとはもともと、ラテン語の「medium=中間の」から派

生し、16世紀後期から使われ始め、17世紀初期までに介在的もしくは中間的な働きを意味するようになった言葉であった。レイモンド・ウィリアムズは、バートンが17世紀初頭に「視覚には対象、器官、メディウムという三つのものが必要である」と語り、ベイコンが「言葉というメディウムによって表現された」と語ったことに触れている<sup>24</sup>。これらの用例から、初期にはメディア概念が伝達作用やコミュニケーション媒体に限定されてはいなかったことがわかる。むしろ、初期にあってメディア概念は、ラテン語のmediare（「半分に分ける」「中間を占める」「仲裁・和解する」等の意）から派生したmediationとも深く結びついた言葉だったのである。そして、この場合の「仲裁・和解する」という意味には、物質的、心的な介在の働きだけでなく、神と人間、精神と世界、観念と客体の調停という次元までが含まれていた。

このように、物質的、心的な媒介という初期のメディア概念に対し、18、19世紀には新聞をメディアの一種として理解する考え方が広がっていく。そして20世紀までに、新聞から映画やラジオに代表されるマス・メディアが現実の構成に決定的な作用を及ぼすようになると、メディアとは、もっぱらそうした情報媒体を指すのだという認識が支配的になっていった。逆にいうなら、まさに19世紀以降の情報手段の発展のなかで、そもそもの媒介的・仲裁的な作用としてのメディアという概念、つまり意識や思考とその対象物、さらには精神的、超越的な世界を媒



介するプロセス（＝メディエーション）としてのメディアの概念は、しだいに背景に退けられていった。こうして20世紀を通じ、メディアとは送り手から受け手へのメッセージ伝達を媒介する手段なのだという考え方が広まる。この考え方を典型的に示したのはシャノン流の通信理論だが、他にもラジオからテレビに至る放送をめぐるマス・コミュニケーション理論が発展するなかで、メディアが有する媒体としての透明性が強調されていった。

やがて1960年代以降、このような近代的メディア概念に対し、数多くの批判が向けられていく。この流れに先鞭をつけたのはマーシャル・マクルーハンであった。「メディアはメッセージ」という彼の古典的な一言は、マス・コミュニケーション理論の急所を衝き、そこで等閑視されてきたコミュニケーションのマテリアルな次元を再び浮上させた。しかし、すでにマクルーハン以前、たとえばヴァルター・ベンヤミンは、言語の非手段性、つまり意味は言語を通して伝わるのではなく、むしろ言語において実現するのだということを理解していた。この場合、言語は最も原型的なメディアであり、そのメディアとは何らかの外の意味を伝達する媒体というよりも、それ自身が意味を媒介的に成立させるトポスなのである。こうした考え方を発展させるならば、言語のマテリアルな次元への注目からさらに進んでメディエーション＝仲介過程としての言語という観点を浮上させていくことになる。

つまり、このような流れのなかで言語とメディアを捉え返すならば、言語＝メディアとは、コミュニケーションの技術的前提であるという以

上に、相互主観的なやりとりのなかで意味が成立する過程＝場そのものであると考えられるのである。このような相互主観的なプロセスは、送り手から受け手への意味の伝達というよりも、何重にも折り重なる仲介過程＝メディエーション、意味が調停されていくプロセスであると考えられる。ちょうど文学の翻訳が、一方の言語から他方の言語へのたんなる移し替えではなく、一方の言語において成立した意味が、他方の言語のなかで構成され直していく、つまり連鎖的な媒介と調停のプロセスであるのと同じように、日常の諸々のメディアにおいて実現しているのは、一方の送り手から他方の受け手への意味の伝達というよりも、諸主体の間での連鎖的な語り直しや相互調停のプロセスなのである。

すでに示してきたように、本論が取り上げる「エンサイクロペディア＝百学連環」は、このような仲介的、相互的なプロセスとしてのメディエーションを、一方では近代的な知の体系の構築に向けられる学びのプロセスとして可能にし、他方ではそうした知の体系に多方面からの批判的介入のプロセスとして可能にする、そのような〈メディア／メディエーション〉としてさまざまな人々によって夢想され、実現されてきた。このエンサイクロペディアのプロセス性、相互媒介性は、単にディドロのような人物の卓抜なネットワーク能力によってだけなされたのではなく、むしろ近代のさまざまなエンサイクロペディア＝百科事典編纂の歴史に伏在し続けたとみることができる。実際、われわれはすでに近代日本の百科事典出版が、単なる出版社の営利事業の域を超えて、しばしば出版社がその存在自体を賭して膨大な知識人を近代国民国家の知

の体系のなかに総動員していく「上から」とも「下から」ともつかぬ巨大大業となってきたこ

### デジタル化されるエンサイクロペディア

そこで最後に考えていかなければならないのは、以上で述べてきたようなエンサイクロペディアをめぐるプロセスが電子化され、デジタル化されていくことの意味についてである。百科事典の電子化が始まるのは、1980年代後半からのことである。その嚆矢は、『The Academic American Encyclopedia』全21巻の全文と図版を収録して1986年に出版された『グロリア電子百科事典』であったといわれている。この世界初の本格的な電子版エンサイクロペディアは、項目検索や条件検索、全文検索のほか、図版や地図からの検索も可能にすることで以後の百科事典の電子化のスタイルをつくりあげた。アメリカではグロリアに続き、『ブリタニカCO-ROM』や『コンプトン百科事典』電子版などが続き、これらは早い段階でインターネットでオンライン化されていく。90年代になると、ヨーロッパ各国でも続々と百科事典の電子化が進められ、イギリスでは『ハッチンソン電子百科事典』が、フランス『アシュット・マルチメディア事典』に続いて大項目主義の『CD ユニベルサリス』や小項目主義の『ラルース・マルチメディア百科』が出され、ドイツでは『LEXIROM』、イタリア、ロシア、スペイン、カナダ、オーストラリアなどでも続々と電子版百科事典刊行の波が広がっていき、文字通りグローバル化していくことになる。

他方、過去の百科事典をインターネット上で開放していこうという試みも90年代に始まって

とを確認してきた。

1995年、プロジェクト・グーテンベルクは1911年に出版されたブリタニカ百科事典の11版をデジタル化していく計画を構想した。このプロジェクトは第1巻をデジタル化した後で中断するが、2002年には28巻のテキストデータがネット上に公開されている。他にも、直接百科事典を銘打ったわけではないにせよ、百科全書研究の第一人者であるロバート・ダントンがネット上で90年代後半に始めた新しい電子的な歴史書『文学ツール・ド・フランス』などのプロジェクトがある。長谷川一が紹介するところによれば、このダントンの計画では、ハイパー・テキストの上層にはテーマを簡潔に述べたものを、次の層には論旨を敷衍したものを収める。第3層は資料を収めて資料に注釈を加え、第4層には理論的、歴史的方法論の観点から先行研究からの引用が置かれ、第5層には大学の授業用のディスカッション・テーマやシラバスが収められ、最後の層には著者と編集者のやりとりや読者からの手紙など、二次的に発生したコミュニケーションの痕跡が含まれる<sup>25</sup>。この計画は、直接的には歴史書のハイパー・テキスト化を狙ったものだが、それが全体として歴史の多様な解読と大学での学習や会話のプロセスに結びつく点で、エンサイクロペディア=百学連環ときわめて近い性格を持ってきているのがわかる。

日本において、このような海外の流れを受けて百科事典のデジタル化を先導していったのは平凡社『世界大百科事典』のCD-ROM版であ

る。平凡社と日立の共同出資によって設立された日立デジタル平凡社により、この『世界大百科事典 CD-ROM版』が出版されたのは1992年のことであった。もともと平凡社のこの百科事典が、編集委員約520人、執筆者約7000人という壮大な事業であったことはすでに述べた。当然、そのデジタル版も、総項目数約9万、索引語約42万、図版約4200点という大規模なものになった。とりわけ、この日立デジタル平凡社のCD-ROM版百科事典の最大の特徴は、規模の大きさだけでなく、さまざまな検索システムの積極的な導入にあった。通常の索引検索や全文検索に加え、エリアやジャンルといった編集の視点で分けられた項目グループ検索、イメージから項目を引き出すビジュアル検索、たとえば、「光」という言葉から「黄金」「オーロラ」「天照大神」「啓蒙」などといった「光」の精神史とでもいうべき系列が検索されてくる例示検索など多くの実験がなされていった。

当時、平凡社においてこのプロジェクトをリードした龍澤武は、一連の百科事典のデジタル化を、エンサイクロペディア本来の可能性を具現化するものとして受け止めていた。龍澤がとりわけ重視したのは、読者との応答可能性である。彼は、エンサイクロペディアというメディアの形式が、そもそも通常の書物以上に読者という契機を内蔵したものだという。エンサイクロペディアは「非専門家の読者の疑問や好奇心に応えるために、当代のあらゆる専門知識を動員」するという構造を根本に含む。とはいえ読者に個別に質問をして項目を立てたり、マーケティングのように調査を通じて項目を立てていくということは、この場合には意味をなさない。

そこで、そのような役割を介入的に媒介する者として編集委員が必要となってくる。彼らは、読者を意識しながら、「どういう項目を立てれば自分が任されている領域への質問に的確に答えることができるか」を見極めなければならない。編集委員は読者に代わって問いを立て、執筆者の知識を結びつけながら全体として問いへの答えを組織していく<sup>26</sup>。いってみれば百科事典では、古典的な書物のように「作者」と「読者」が二項図式的に分かれてはおらず、むしろ編集委員、執筆者、コメンテーター、これらの書き手の間の相互作用や読者からの想定される質問など、何重にも書き手／読み手の応答が重層構造をなすなかで編集がなされていくものなのである。

実際、平凡社の『世界大百科事典CD-ROM版』が多様な検索方式を取り入れていったことの根底には、このような読者との応答可能性の幅を広げておこうという発想があったものと思われる。しかしながら、この種の検索システムにとどまらず、百科事典のデジタル化には、それまで紙媒体という制約のなかで閉じられてきたこのメディアの可能性を、一挙に水平的にも、垂直的にも開いていくことを可能にする契機が含まれていたと、龍澤はいう。つまり百科事典は、インターネットと結びつくことによって、一方ではリアルタイムに社会の変化や読者の関心を取り込んだ記述を加えていくことができるようになる。他方、これまで書かれてきた無数のテキスト、膨大な資料がデータベース化されていくなれば、それらとの間に百科事典から参照関係を築いていくことが可能になる。そのようにして、百科事典の時空に、歴史的な厚みと

リアルタイム性を同時に持たせていくことが可能になるのである。かつてハロルド・イニスは、石碑や羊皮紙の書物のような時間的な持続性に重心を置いたメディアと、電信や放送のように空間的な同時性に重心を置いたメディアに区別

### ウィキペディアとエンサイクロペディアの開放

しかし、百科事典にとってインターネットが、読者の関心とのリアルタイムな応答や過去のテキストや資料との参照関係など、これまで実現できなかったこのメディア本来の可能性に道を開いてくれるものだとするならば、インターネットにとって百科事典はどのような存在なのだろうか。インターネットにとっての百科事典との親和性とは、これまで印刷媒体のなかで一定のかたちを与えられてきた百科事典全体をネット空間が呑み込んでしまい、その根本を変容させていくことを含意しているのではないか。インターネットは、とてつもなく膨大な玉石混淆の情報の集積体である。しかも、ある一定の範囲において時間的な蓄積が可能である。このような情報の集積体が適切な検索システムと結びつくならば、それ自体、巨大なエンサイクロペディアと化していく可能性を含んでいる。そして、このようなインターネット＝エンサイクロペディアが実現されていくとき、これまで紙媒体での出版を前提的な枠組みとして成り立ってきた百科事典＝エンサイクロペディアの概念は、根底から崩壊せざるを得ないのではないだろうか。

実際、すでにYahoo!やGoogleの検索システムが発達し、われわれがいかなる用語でもネット上で検索可能になっていった頃から、ネット空間のエンサイクロペディア化は進んでいたと

して、近代を通じて時間性のメディアが空間性のメディアに圧倒されてきた過程を考察した。デジタル化した百科事典は、このなかなか両立しがたいかに見えるメディア二つの次元を高度に共存させようとするのである。

考えることが可能である。そして近年、とりわけWikipediaの登場と発展によってこの傾向は決定的になった。知られるように、Wikipediaはインターネット上で作成、公開されるオープンコンテンツ方式の多言語エンサイクロペディアである。「Wikipedia」という名称は、この事典をネット上で作動させる著作権フリーのソフトウェア「Wiki」と、エンサイクロペディアの後半部の「Pedia」の合成語で、文字通り訳せば「Wikiによる学び」ということになる。その最大の特徴は、編集と執筆のプロセスの万人への開放、つまり誰でも項目を設定でき、誰でも既存の項目に自分の文章を上書きできるという点にある。当然、多くの項目の記述において上書きに上書きが重ねられ、さまざまな異なるバージョンが累積されていくことになる。Wiki-pediaでは、このような累積する記述の履歴や相互の差異が遡及的にたどれるようになっており、概念の説明を最終結果だけでなく一連の異なる記述の連なりとして理解できるようになっている。

もともこのWikipediaのプロジェクトがスタートしたのは、2001年1月のことだった。プロジェクトを始めたのはラリー・サンガーとジミー・ウェールズというカリフォルニア在住の二人の人物である。サンガーは、すでに以前か

らNupediaという専門家がインターネット上で協力しながら百科事典を構築するプロジェクトを進めていた。Wikipediaはサンガーが、Nupediaのような専門家ベースのインターネット百科事典の編集や執筆の主体を、広く草の根的なレベルに開放しようとしたとき誕生した。やがて、この万人参加のシステムは、先行するNupediaを圧倒していくのだ。誕生してからまだ5年と経ていないにもかかわらず、Wikipediaへの参加者はまさしく爆発的な勢いで増え続け、2005年10月の時点でこのインターネット百科事典に掲載されている項目数は、英語版が約75万項目、日本語版が約15万項目、全言語を合わせれば260万項目にも上る空前の規模に達している。登録者数は3万人を超えるとされるが、登録なしでも執筆に参加できるから、事実上の執筆者数は限りなく拡大している<sup>27</sup>。

誰でもが執筆に参加できるということは、書き手の品質保証がないことである。結果として出てきたのは、果たして真偽の定かでない怪しげな情報の洪水だったろうか——。Wikipediaにおいて最も注目すべきことのひとつは、このように編集や執筆におけるプロとアマ、専門家と一般ユーザーの間の垣根を一切取り払って作り上げていった百科事典が、それなりに精度の高いものになっている点である。実際、2005年12月、『ネイチャー』誌は、Wikipediaと『ブリタニカ百科事典』の科学関係の項目についての詳細な比較検討を行い、Wikipediaの記述の正確さが『ブリタニカ百科事典』レベルの高いものであることを保証した<sup>28</sup>。全体として、この草の根民主主義的なエンサイクロペディア・プロジェクトは、一定の成果を挙げているのであ

る。もちろん、Wikipedia自身も認めているように、「誰でも参加可能なため、長期間大量に投稿した者の意見が最終的に通ることが多い」傾向があり、英語版では「親ユダヤ的な見方が支配的」になったりもする。こうした個々の問題点にもかかわらず、場合によっては項目記述の履歴を見るならば、概念の規定をめぐるような対立あるのかを明らかにすることも不可能ではない。

たしかにインターネット上に誰もが自由参加できる百科事典を構築していこうという動きはWikipedia以前にも存在した。たとえば、Wikipediaのサイト自身が紹介するところでは、1991年にはダグラス・アダムスの著作のファンたちが、アダムスの著作に登場する架空の百科事典を実際に作ろうとしていたし、93年にはインターネット上に誰でも参加できる百科事典を作ろうとする「インターベディア」と呼ばれる計画が構想されていた。さらに今日では、ハイパーテキスト型のエッセイの集積体として公開されているEverything2であるとか、皮肉な内容の記事で構成されるネット上の百科事典H2G2など、ネット上のエンサイクロペディアにもさまざまなヴァリエーションが出てきている。そしてWikipedia自体においても、自由参加でネット上に言葉の意味や用例、訳語などを収集していく辞書プロジェクトとしてのWiktionary、さまざまな専門領域の教科書や参考書をネット上に自由構成していくWikibooks、著作権フリーのさまざまなテキスト文書を集積させたWikisource、さらに誰でも利用できる画像、音声、動画などの情報を集積していこうとするWikimedia Commonsなどの姉妹プロジェクト



が動いている。

このように見てくると、1990年代以降のインターネットでは、Wikipediaを最も成功した例としつつも、多くの開放型の事典プロジェクトが並行して試みられてきたことがわかる。これらの試みは、これまでの紙媒体ではとても不可能だった事典編集のプロセスにおける執筆者と読者の相互応答の関係をネットのなかで発展させるものであった。ウォレン・サックスは、今日のインターネットが可能にしている非常に大規模な会話（Very Large-Scale Conversation）が、従来の意味とは異なるタイプの公共圏を生み出していく可能性を指摘している<sup>29</sup>。ここにおいて重要なのが、情報ないしは情報の流れを可視化する技術である。事実、情報の可視化は、今日工学やシステム管理の領域を含む多様

#### デジタル・アーカイブと百学連環プロジェクト

ところで、90年代以降のインターネットにおいて生じていたもう一つの重要な変化は、世界各地でのデジタル・アーカイブの興隆であった。それまで博物館や図書館、公文書館などの書庫の奥深くに所蔵され、限られた専門家だけに利用されていた貴重な資料類がデジタル化され、さまざまなアーカイブがインターネットを通じて万人にアクセス可能になっていった。この動きがとくに急だったのはアメリカ合衆国で、2000年代までに膨大な数と内容量のデジタル・アーカイブ化が構築され、すでにネット上で公開されている。こうした各地でのアーカイブ興隆の結果、次なる課題として浮上したのは、異なるジャンルや形態の資料のアーカイブをどのようにして広範囲に横断的に繋いでいくのかと

な分野で関心を集めるテーマとなっているが、ここでサックスがレヴ・マノヴィッチのニューメディア理論などを参照しながら構想するのは、けっして国家の監視技術や企業の技術開発のために組織されるような可視化技術ではなく、流通する膨大な量の知識や情報のなかで、人々がなお方向喪失に陥らないための批判的な地図法である。それはいわばネット上で結ばれる情報の地政学として、大量に分布する情報の意味的な編制を可視化していくのである。Wikipediaの試みは、エンサイクロペディア＝百科事典という形式を媒介に、こうした情報知の動きと連動するものであり、同じように、今日では多くの種類のCMS（Contents Management System）が草の根的なレベルから大規模な会話を構造化しつつある。

いう問題である。同時にまた、同じ資料群に対しても、単にこれをデジタル化し、所与の枠組にしたがってアーカイブ化するというのではなく、どのようにしてさまざま異なる分析の視座をアーカイブと結びつけていくのかという問題も発生する。

これら二つの課題は構造的に結びついており、同一の課題の両面だともいえなくもない。というのも、論理的にはいかなるアーカイブもそれをまとめ上げる一定の視点なしには存在し得ない。実際には、多くのアーカイブは、大学や博物館、図書館に特定のまとまった資料群がたまたま存在していたか、寄贈されたのをきっかけに構築されることが多い。しかし、直接の経緯はどうであれ、そのようなアーカイブの学問的



な価値を決めていくのは、資料群をいかなる理論的、方法論的なフレームのなかに位置づけていくかという点である。アーカイブ化される資料群を構造化していくためにも、一定の概念的視座が不可欠となる。そしてこのメタレベルでのアプローチの視座や概念に媒介されながら、異なる組織や地域のアーカイブが結びついていくのである。今日のインターネット環境とデジタル・アーカイブの結びつきは、これまで地理的に離れているために独立して存在するにすぎなかった各地の資料群が、ネット上で相互に結合していく可能性を大幅に拡大させた。しかしながら、それぞれ異なるフォーマットで構造化されているアーカイブが相互に結びついていくには、融通性に富んだメタレベルの概念フレームが必要である。

メタレベルの概念が融通性に富むということは、それが必ずしも専門知の系統樹に整理され尽くさないことである。もしも、そのように分析の視座が整理できてしまうならば、近代史のアーカイブは近代史に、美術史のアーカイブは美術史に、人類学のアーカイブは人類学にというように、すべてのアーカイブを専門分野別に分けて事足りよう。しかし、今日の世界各地でのデジタル・アーカイブ構築は、専門的な学問の分業体制によって進められているよりも、その種の枠を越えて、より自由で越境的な仕方、それぞれの担い手のフィールドへの自発的な関心に基づいて進んでいる。しばしば魅力的なアーカイブは、一人ないし数人の涙ぐましい熱意に支えられている。そしてその多くは、学問の分業体制というよりも、特定の具体的で個別的なテーマに対する強い関心によって促されている。

したがって、このようなアーカイブを構造化し、横断的に結びつけていく概念的なフレームとしては、専門分化し、体系化した既存の学問分野での概念のツリーよりも、むしろそれらを横断的に結んでいく緩やかな概念ネットワークのほうがふさわしい。まさしくここに、多数のアーカイブを連携させるメタ・アーカイブの論理として、再びエンサイクロペディア＝百学連環の論理が登場するのである。

ウィキペディアのような開放型のインターネット百科事典の興隆を経た時代のエンサイクロペディア＝百学連環が、このように世界各地の多様なデジタル・アーカイブを横断的に結びつけていくためには、すでにあるウィキペディア型の編集参加システムだけでなく、いくつかの新しい技術的、方法的な挑戦がなされなくてはならないだろう。そのポイントは、方法論的な概念システムと具体的な資料アーカイブとが多面的、重層的に結びついていくことを可能にするような構造的な仕組みである。すでにあるキーワード検索や全文検索ではなく、むしろいわゆる連想検索のシステムが目指しているような概念相互のコンテクスチュアルな距離化とヴィジュアルライゼーション、すなわちさまざまな分析的概念をそれが使用されている多面的なアプローチの文脈にしたがって立体的に構造化し、可塑的な仕方に対象と結びつけていくようなソフトウェアの開発と実用化が要請されているのである。情報学研究所の高野明彦が進めているいくつかの連想検索エンジン（新書マップ、Webcat Plusなど）や東京大学工学部での美馬秀樹が開発した検索エンジンを使った実験（知の構造化プロジェクトなど）、日立システムアンドサー

ビス社の藤井泰文が進める知のコンシェルジェなどが、こうした方向を萌芽的に示唆している。

そして情報学環でも、山内祐平研究室のiii-online や石田英敬研究室の「TV分析の知恵の樹」プロジェクト、馬場章研究室の坪井プロジェクト、吉見俊哉研究室の「戦争とメディア」プロジェクトなどをはじめとして、多くのデジタル・アーカイブ構築ないしはネット上の教育プロジェクトが進行している。本論がこれから主張していこうとする大きなテーマは、このような多様なデジタル・アーカイブやネット上での学びのプロジェクトを横断的に結びつけていくひとつの考え方として、「エンサイクロペディア=百学連環」が概念的、方法的な有効性を持っているという点である。われわれはこの点を明らかにすることによって、本論の冒頭で指摘し

た、エンサイクロペディアの本義に忠実な西周の訳語「百学連環」を、21世紀の日本に蘇らせたいと思う。とはいえ、実際に今日のデジタル情報社会のなかで「百学連環」を再生させるには、たとえば映像イメージと言語テキストの同じフォーマットでの処理、研究書・文献データからの自動的な項目生成、会議・授業映像や市販記録媒体とのリンク、海外の研究拠点の事業・教育との多言語ネットワーク、トランスナショナルな教育研究のプラットフォームの構築などといった、多くの解決しなければならない技術的、制度的課題がある。本論文では次回以降、歴史的な「エンサイクロペディア=百科事典」の系譜を再検証しつつ、こうした現代的課題にも少しずつ近づいていきたい。

## 註

- 1 大久保利謙編『西周全集』第4巻、宗高書房、1981年、11頁。西周がその私塾育英社において「百学連環（エンサイクロペディア）」について論じたのは、明治3（1870）年頃であるとされている。現行本の筆録者である永見裕の記録によれば、明治4年9月、西は「百学連環」の「稿十冊ヲ編纂シテ百学連環ト称シ、之を藩庁ニ差出」したともされている。この稿本は現存しないが、少なくとも西の百学連環論が1870年代初頭に講じられていたことは間違いないであろう。大久保利謙は、西の百学連環論の背景には、彼がオランダ留学中にフランスの社会学者オーギュスト・コントの著作から受けた影響が顕著に認められることを指摘している。
- 2 同書、11-12頁。
- 3 同書、12頁。
- 4 桑原武夫編『フランス百科全書の研究』岩波書店、1954年、27頁。同書のなかで中核をなしている百科全書プロジェクトの人間関係の側面についての分析（「第二章 百科全書における人間関係」）は、桑原と鶴見俊輔、樋口謹一という3人によって執筆されている。この卓抜な分析からは、桑原らの人文研究所の研究スタイルと鶴見らの思想の科学研究会の視座の間で創造的な対話がなされた痕跡を読み取ることができ、後述するように、まさにこうしたプロジェクト自体、本来の意味で「百科全書=百学連環」的な達成であったといえよう。
- 5 同書、38頁。
- 6 同書、39頁。この百科全書の水面下の集団的コミュニケーションの厚みへの注目は、おそらくこの百科全書研究の主要メンバーの一人であった鶴見俊輔の洞察ではないかと推察される。というのも、こうした裾野の広い集団性への関心は、京大人文研グループの関心である以上に、鶴見を中心メンバーとする思想の科学研究会の関心であり、同研究会のいくつかの共同研究を貫くものでもあった。
- 7 桑原 前掲書、iii頁。
- 8 吉見俊哉『万博幻想』ちくま新書、2005年、45-60頁。

- 9 龍澤武「平凡社＝日立におけるデジタル百科全書の試みを振り返る」エンサイクロペディア研究会（COE「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」プロジェクトC、2005年6月10日、東京大学大学院情報学環会議室）での報告。同報告は、筆者が主宰するエンサイクロペディア研究会において、日立デジタル平凡社が90年代に試みたデジタル・エンサイクロペディア構築をテーマになされたものであり、平凡社顧問の龍澤氏のほか、日立システムアンドサービス社の藤井泰文氏にご報告をいただいた。
- 10 ビーター・パーク『知識の社会史』新曜社、2004年、143-144頁。
- 11 同書、136頁。
- 12 同書、147頁。
- 13 ミッシェル・フーコー『言葉と物』新潮社、1974年、59-63頁。
- 14 同書、63-65頁。
- 15 同書、82-83頁。
- 16 同書、88-92頁。
- 17 同書、151-161頁。
- 18 同書、18-21頁。
- 19 同書、88頁。
- 20 同書、266頁。
- 21 ビーター・パーク、前掲書、143-144頁。
- 22 寺田元一『編集知の世紀』日本評論社、2003年、73頁。
- 23 同書、178-179頁。
- 24 レイモンド・ウィリアムズ『完訳 キーワード辞典』平凡社、2002年、203-207頁。
- 25 長谷川一『出版と知のメディア論』みすず書房、2003年、209-217頁
- 26 龍澤武、前掲報告
- 27 Wikipedia のメインページにおける「ウィキペディア」の説明。Wikipediaの活動の規模、主な特徴、プロジェクトの運営形態、発足の経緯、拡大の契機、先行事例、姉妹プロジェクトなどについて解説している。
- 28 Giles, Jim, "Special Report: Internet encyclopaedias go head to head", Nature, No.438, 15 December, 2005
- 29 Sack, Warren, Discourse Architecture and Very Large Scale Conversation, Saskia Sassen & Robert Latham eds., The Digital Order, Princeton University Press, 1999,



吉見俊哉（よしみ しゅんや）

1957年生まれ。東京大学大学院社会学研究科単位取得退学

[専攻領域] 社会学・メディア研究・文化研究

[著書・論文]

『万博幻想』（筑摩書房、2005年）

『メディア文化論』（有斐閣、2004年）

『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』（人文書院、2003年）など多数

[所属] 東京大学大学院情報学環

[所属学会] 日本学術会議、日本社会学会